ラリー

小川武史

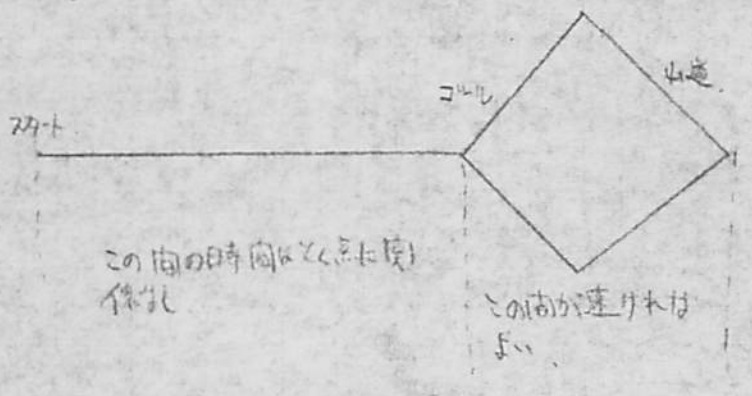
このラリーで、私は前日のオリエンテーリングの結果から、沢木さんと組む事になった。これというのもオリエンテーリングで「この神社は何を記念して作られたか」という問いに対して、なんと「八幡大菩薩」と答えてドーンと減点されたためだった。とにかく、ラリーは頑張ろうと思った。スタートして、ビンビン走った。前半の中間地点あたりで役員の小島さんが居た。それで私達にむかって、「主見と曽我部のチームが遅かったぞ、あれは張敵だよ」といった。今に思えば、このチームは実に良いチームだと思う。今伝統の決戦の続いている、曽我部でしと主見が、同じチームで走っていたのである。小島さんの言葉から、私たちは間違ったルールに確心を持った。休みもせず、ただビンビン走った。中間地点でも大して休まず、山に向って走った。この山道を速く走りさえすれば、優勝できるのだと思い、本当に必死だった。休みもせず、ひたすらに沢木さんについていった。山道は全くすさまじい道で、土がタイヤにくっつき、フェンダーとタイヤの間がせばめられ、タイヤがまわらなくなってしまうのである。私の自転車はこうまではならなかったが、沢木さんは、タイヤが止ったまんまで、峠をひきずり上った。峠を下ってからもただひたすらに走った。時ずりかわす言葉といえば、

「今回はかなり上位にはいれるんじゃないかな」

「当然はいるでしょう！当然1位でしょう！」

ゴールして、この機待は打ちやぶられた。ルールが自分のまえてたものと全然ちがうのだ。

私たちの考えていたルール



実際のルールでは、中間地点、つまりゴールで折って来る所へ何時に着くかで勝負は決まる。まうすると山道は頑張っても全くムダだったのだ。実にくやしかった。

こうして、くやしがっている我々は、サイクリング部の部員の冷酷さを知った。勝負にかけるイキコさというか、全くすごい。勝負の始まる前では、ルールについて、他人が間違っていようがいまいが知らん顔、むしろ間違ってとらえていると、心の底でニヤりとし、絶対に正しいルールを教えない。そして、勝負が終ると、ひたすら冷笑をなげかけ、バカにする。こっちが腹をたてたりしている時など、バカにしかたがすごい！かといって、そいつに対して腹を立てると、他の部員が、おもしろがる。とにかく、我がクラブは、メシと遊ぶ勝負に関しては、非常にミビヤなものがある。勝負をするときはやっぱりルールを皆んなが正確に把握できる様にしなければならないと思う。